

頼山陽と愛石趣味

佐藤利行

【キーワード】頼山陽・愛石・中巖円月・禅林・水石

一

中国六朝時代、東晋の干寶が編んだ『搜神記』巻四の中に、次のような話が収められている。^①

豫章有戴氏女、久病不差。見一小石、形像偶人。女謂曰、「爾有人形、豈神。能差我宿疾者、吾将重汝」。其夜、夢有人告之、「吾将祐汝」。自後疾漸差。遂為立祠山下。戴氏為巫、故名戴侯祠。

豫章に戴氏の女有り、久しく病みて差えず。一小石の、形偶人に像たるを見る。女は謂ひて曰く、「爾人形有り、豈に神なるか。能く我が宿疾を差やさば、吾は将に汝を重んぜん」と。其の夜、夢に人有りて之に告ぐ、「吾将に汝を祐けんとす」と。自後、疾漸く差ゆ。遂に為に祠を山下に立つ。戴氏は巫と為り、故に戴侯祠と名づく。

豫章に戴氏の娘がいて、長らく病氣を患って癒えることがなかった。あるとき一個の人の形をした小石を見つけた。娘は言った、「あなたは人の形をしているけれども、神様なの。わたしの長患いを治すことができたなら、わたしはあなたを大切にしよう」と。その夜、夢に人が現れて告げることに、「わたしはあなたを助けましょう」と。それから後、病氣は少しずつ癒えていった。そこで祠を山の下に立てた。戴氏は巫となったので、戴侯祠と名付けられた。

ここで注目したいのは、この娘が人の形をした小石を拾い、それに話しかけると言うことである。この『搜神記』に見える話は、人と石との関わりを示す資料としてはもとより、今日の愛石趣味における姿石の愛好とも相通するところがあつて甚だ興味深いものがある。今回取り上げる頼山陽の遺愛石の中にも、観音像や寿老人の形をした所謂姿石の範疇に入るものがある。

さて、ここでいう愛石趣味とは、今日における「水石」(すいせき)を意味し、これは我が国の伝統文化を代表するものの一つとして、「盆栽」とともに明治以降、文人趣味の双壁であった。そもそも水石とは、一個の自然石を鑑賞の対象とし、その中に自然の山水を連想して自らを遊ばせるというものである。今日では、砂を敷き詰めた水盤上に石を設え、水をそそいで鑑賞するか、或いは石に木製の台座をしつらえて眺めるのが一般的な鑑賞法である。こうした水石趣味は、我が国のみならず、広くアジア諸国の間でも愛好され、ヨーロッパ・アメリカにおいても「SUISEKI」の名で多くの愛好者を集めている。

以下、小論では現代水石趣味の基礎を築いたと言っても過言ではない頼山陽(一七八〇〜一八三二)の愛石趣味について、彼の詩文などを通して見てゆきたい。

二

頼山陽の愛石趣味を考察する前に、我が国における愛石の歴史を概観しよう。^②日本において水石がどのように鑑賞されたのかということについて、最も早い時期の史料としては鎌倉時代、禅林社会における詩文がある。ここでは、中巖円月(一二三〇〇〜一三七五)の詩を取り上げる。

中巖円月には、「謝盆石詩」があり、それには次のような序が附されている。^③

友人正仲師、得奇石於伊勢志摩海濱、厝諸盆。盆廣尺有二寸、其縱過廣五寸。細砂布底、如綠玉屑。亦勢州産、可愛也。終歸之予机案。宛有五嶽勢。用隻手可持、夜移之階下、以受風露涵毓。昼亦机案為玩好具。昔吾祖居礪陰時、天竺飛來講徒供石。祖作賦喜之。其中有言、石眠人兮猶人視石。而今此岩雖叢微、堅剛如金。金石交固、不可渝之効歟。詩而為謝云。

友人正仲師、奇石を伊勢志摩の海濱に得、諸を盆に厝^おく。盆の廣さは尺有二寸、其の縦は廣さ五寸を過ぐ。細砂もて底に布くに、緑の玉屑の如し。亦た勢州の産にして、愛す可きものなり。終に之を予が机案に歸す。宛も五嶽の勢ひ有るがごとし。隻手を用て持つ可く、夜は之を階下に移し、以て風露を受けて涵毓^{かんいく}せしむ。昼は亦た机案にて玩好の具と為す。昔、吾が祖居礪陰^{かりん}し時、天竺より飛來せし講徒石を供す。祖は賦を作りて之を喜ぶ。其の中に言有り、「石の人を眠^みるや猶ほ人の石を視るがごとし」と。而して今、此の岩叢微なりと雖も、堅剛なること金の如し。金石の交はり固くして、渝^なる可からざるの効あるか。詩して謝と為して云はく。

これに拠れば、中巖は、友人の正仲彦貞が伊勢志摩の海岸で採取し、盆にしつらえて鑑賞していた石を譲り受けたようである。「終に予が机案に歸す」とあることから見て、彦貞の持っていた

石をかねてより所望していたものと思われる。片手で持てるほどの大きさの此の石を手に入れた中巖は、その感謝の気持ちで込めて詩を作ったのである。その詩は次のような七言絶句の詩である。

遺我方盆才尺餘 我に遺らるる方盆は 才に尺餘

是中能得納方輿 是の中 能く方輿を納め得たり

大嵩大華衡恒岱 大嵩 大華 衡 恒 岱

不出尋常許綺疏 尋常を出でずして綺疏を許す

此の詩には「壬子夏五、東海一漚子自書于□之所」との添書があり、中巖が詩を作ったのは応安五年五月、七十四歳の時であることが分かる。一尺餘りの長方の盆に置かれた石を中巖は眺めながら、心を五岳（嵩山・華山・衡山・恒山・岱山）に遊ばせていたのであろう。

ところで中巖には、「求菖蒲」という詩がある。④ 詩には次のような序が附されている。

行庭忽見盆菖蒲。不知其措之者為誰也。詩以干之、欲永属吾也。

庭を行きて忽ち盆の菖蒲を見る。其の之を措く者の誰為るか

を知らざるなり。詩以て之を干め、永く吾に属せしめんと欲す。

「庭を歩いていて、ふと盆の菖蒲が目についた。誰が置いたか分からないものであるが、これを欲しがっている気持ちを詩に詠んで、永くわたしのものとしようと思う」と言うのである。詩は五言十二句から成る次のようなものである。

我自築陽歸 我 築陽自り歸りて

空庭日日游 空庭に日日游ぶ

空庭有何物 空庭に何物か有る

雪消蘭芽抽 雪消えて 蘭の芽抽えたり

菖蒲不知主 菖蒲 主を知らず

盜甌横蟠膠 盜甌に横たはりて蟠膠す

鬼神非吾畏 鬼神は吾の畏るるに非ざるも

坡仙語可羞 坡仙 語 羞づ可し

正是尠薄者 正に是れ尠薄の者なれば

欲之未敢偷 之を欲するも未だ敢へて偷まず

願言情人意 情人の意を願言ひて

惠斯青髮髻 斯の青く髮髻たるを恵まれんことを

この詩を見ると、当時は菖蒲を盆で栽培していたことが分かる。これは水盤に石を置いて鑑賞するものとは別のもので、いわゆ

る盆栽として菖蒲を観賞していたように思われる。

そもそも盆石として盆に据えた石のみを鑑賞する以前には、石に石菖を付け、石を山に石菖を草木に見立てて鑑賞する方法が用いられていた。例えば無学祖元(一二二六―一二八六)には「太守送菖蒲石」(太守 菖蒲石を送る)という次のような詩が残されている^⑤。

一峯寒浸碧瑠璃 一峯 寒たく浸る 碧の瑠璃

浪打枯巖水半欵 浪は枯巖を打ち 水 半ば欵^{そぼだ}てり

髻髴去年天海外 髻髴たり 去年 天海の外

客帆初到博多時 客帆 初めて博多に到りし時

祖元は宋の明州の人で、中国五山禅林の天童山景德寺の主座であったのを、北条時宗(一二五一―一二八四)に迎えられた。その相模太守の時宗が菖蒲石を送ったのに答えたのが此の詩である。水を張った青磁の水盤に据えられた水石を島に、風に揺らぐ水を浪に見立てて眺めていると、ふと去年、天海の彼方から初めて博多にやって来た時のことが思い出される、というのである。

また、祖元とともに渡来した中国僧に鏡堂覚円(一二四三―一三〇六)がいる。覚円にも「菖蒲石」と題する次のような詩が残されている^⑥。

碧玉盤中水石間 碧玉の盤中 水石の間
根蟠九節劔鋒寒 根は九節に蟠り 劔鋒寒し
清標富足蘿窓底 清標 富足す 蘿窓の底
三嶋十洲誰共看 三嶋十洲 誰と共にか看ん

青磁の水盤に置かれた石には、石菖の根がわだかまり、その葉は鋭く伸びている。月明かりに照らされた水盤を見ていると、あたかも「三島」(蓬萊・方丈・瀛洲)「十洲」(祖洲・瀛洲・玄洲・炎洲・長洲・元洲・流洲・生洲・鳳麟洲・聚窟洲)などの神仙の世界を見るかのようなのであるが、それを一緒に見る人もいない、という。なお詩中の「九節」とは、菖蒲のことで、『神仙伝』に「漢の武帝、嵩山に登る。…夜、忽ち仙人有りて曰く、吾は九疑の神なり。聞く、中岳の石上に菖蒲の一寸九節なるあり。以て之を服すれば長生す可しと。故に来たりて採るのみ」とあるのに拠るものである。

これは明らかに石に菖蒲を付けたものを詠んだものであるが、覚円には「菖蒲」と題する次のような詩も見られる。

根髴挺特孰栽培 根髴 挺特 孰か栽培する
疑是崑崙仙島来 疑ふらくは是れ崑崙仙島より来たらん
清若芝蘭香透頂 清きこと芝蘭の若く 香りは透頂
咸観鼓舞樂春臺 咸観 鼓舞 春臺に楽しむ

此の詩の場合には、先の中巖の詩にもあったように、石菖のみを栽培してそれを鑑賞していたものと思われる。

これらの例からも分かるように、初期の盆石は石に石菖を付けたものを水を張った水盤に置いて鑑賞していたのであるが、これが後には石菖を付けない石だけを水盤に据えて鑑賞するようになったようである。また、これとは別に石菖だけを栽培して鑑賞するものもあった。

さて、中巖円月の師でもある虎関師練（一二七八―一三四六）には「盆石の賦」（『濟北集』巻一）がある。それに拠れば、師練は若い頃には蒲石（石菖を付けた水石）を数盆持っており愛好していた。やがて中年の歳になり、蒲石の趣味も失せていたが、老年になった今、夏の暑さを遣るために昔の蒲石のことを思い出した。そこで、

課童子之使、令収拳石於牆角、抔盆埃而注清冷、外瓷青而

底沙白。

童子の使ひに課して、拳石を牆角に収めしめ、盆埃を払ひて清冷を注ぎ、瓷の青きを外にして沙の白きを底にす。

童子に命じて垣の隅から拳大の石を取ってこさせ、塵を払って清水を注ぎ、青磁の盤に白い砂を布いて置いてみた。そうした

ところ、本当に清々しく暑さを遣ることができたのである。しかるに、

客見笑而言、「清則清矣。争奈其髡何」。

客 見て笑ひて言ふ、「清きことは則ち清し。争でか其の髡を奈何せん」。

客人はそれを見て笑つて言うことには、「清々しいことは確かにそうではある。しかしその髡はいったいどうしたものか」と。ここで「髡」というのは、石に石菖が付いていないことを言うものと思われる。

これに対して師練は、

昔予之登富峰也、躋攀者凡三日。二日出入大林巨樹之間、三朝絶無寸草之緑矣。唯岩石之昭嶠、紫紅之砂礫而已。如此者数十里、遂至絶頂之岑嶠。不特富峰也、喬岳皆不有植物矣。登臨之者不嫌髡、唯愛其峻拔矣。

昔、予の富峰に登るや、躋攀すること凡そ三日なり。二日大林巨樹の間を出入し、三朝絶えて寸草の緑無し。唯だ岩石の昭嶠、紫紅の砂礫のみ。此くの如きこと数十里、遂に絶頂の岑嶠に至る。特に富峰なるのみならず、喬岳は皆な植物有らず。登臨の者は髡を嫌はず、唯だ其の峻拔を愛するのみ。

自ら登った富士山を例に、高い山には植物は生育しないことを述べ、山に登る者は山に草木無きことを嫌うことなく、ただその峻しさを愛するのだと言う。そうして師練は、

子之嫌髡者、其阜埵乎。予之不嫌者、其絶丘乎。

子の髡を嫌ふは、其れ阜埵なればなるか。予の嫌はざるは、其れ絶丘なればなるか。

と結論を下す。

こうした「盆石の賦」に見られる議論によって、虎関師練の時代には石菖を付けない石を水盤に据えて鑑賞するということが既に行われていたことが窺われる。この鑑賞法は、今日の水石趣味にそのまま受け継がれるものである。

以上、禅林社会における愛石趣味の実態について見てきたが、次にはそうしたいわば特別な社会における高尚なる趣味であったものを広く一般の社会にもたらしたともいえる頼山陽の愛石趣味について見てゆきたい。

三

頼山陽（一七八〇〜一八三二）の愛石ぶりは、晩年に構えた書齋である山紫水明処の裏庭に小山のごとくに捨てられた小石の逸話からも分かるように相当なものであった。それは、山陽が

大原女に小遣いを与えて加茂川の上流の小石を拾ってこさせ、その中から自分の好みにあつた石を選びだし、その他の小石を書齋の裏庭に捨てていたところ、それが石の山のようになった、という逸話である^⑦。今、その詩文によって山陽の愛石趣味を見てみよう。

山陽には、「文房七詠」と題する詩がある^⑧。これは山陽が愛玩した七つの文房具、すなわち花餅（古銅膽様）・硯（紫質緑眼、彫為海龍）・水滴（三足蟾蜍）・鎮紙（水晶蹲螭）・研山（豫産）・筆洗（蛮物古銅、含師所貽）・画卷（明王嶼江南春晓図）の七珍のために作ったものである。この詩には次のような序が附されている。

初冬夜深読書。偶見餅花、嫣然可愛。為作詩。顧瓶側諸物、皆習使令者、不可無詩。遂各贈六句。

初冬、夜深く書を読む。偶たま餅花を見るに、嫣然として愛す可し。為に詩を作る。瓶側の諸物を顧みれば、皆な使令に習はば、詩無かる可からず。遂に各おの六句を贈る。

山陽は、七珍それぞれに各々六句の詩を詠じているが、そのうち、「研山」を詠じた詩は次のようである。

研山 豫産

両峯如削成 両峯 削成さるるが如く
 一峯懸欲墜 一峯 懸かりて墜ちんと欲す
 拳大具洞壑 拳大にして洞壑を具へ
 時見吐雲氣 時に雲氣を吐くを見る
 誰知研池側 誰か知らん 研池の側ら
 迤邐南海翠 迤邐たる南海の翠あるを

此の研山なる石は、もとは伊豫松山の野間竹陰の愛石であった。竹陰が上京の際に此の石を携えていたところ、山陽が見て欲しかった。竹陰は詩を作ってくれるならば割愛してもよいということ、山陽は長編の詩を作って研山と交換したのだという。そのいきさつは、次に挙げる詩に附された以下の序によって知ることができる。

伊豫野間生、携一研山、甚奇。余見欲得之。生曰、「苟謝以詩、不敢不割愛」。因用東坡仇池石韻、賦贈。

伊豫の野間生、一研山を携ふるに、甚だ奇なり。余は見て之を得んと欲す。生曰く、「苟も謝するに詩を以てせば、敢へて割愛せずんばあらず」と。因りて東坡の仇池石の韻を用ひ、賦して贈る。

それでは詩の内容を見てみよう。

希榮愛朱紫	榮を希ふは 朱紫を愛し
好色思粉緑	色を好むは 粉緑を思ふ
老悟一身外	老いて悟る 一身の外
百物皆蛇足	百物 皆な蛇足なるを
獨餘愛山障	獨り餘す 山を愛するの障
殫秀未鑿腹	秀を殫ふも未だ腹に鑿さず
脚跟堪踏雲	脚跟 雲を踏むに堪ふるも
塵裡空瑟瑟	塵裡に空しく瑟瑟す
渴瞻如調飢	瞻るに渴くは 調飢の如く
譬羊闕芻牧	譬ふれば羊の芻牧を闕くがごとし
見君一拳奇	君が一拳の奇を見るに
呀窪縮丘瀆	呀窪 丘瀆を縮む
洞竊疑湧霧	洞竊くして 霧を湧かすかと疑ひ
峰秀如削玉	峰の秀づること 削れる玉の如し
觸我烟霞痼	我が烟霞の痼に触れて
發動按難伏	發動 按ふるも伏し難し
昨夜燈生花	昨夜 燈は花を生じ
喜事忽可卜	喜事 忽ち卜す可し
輟君久周旋	君の 久しく周旋するを輟めしめ
與我新追逐	我と新たに追逐せん

何凶坐市闖 何ぞ凶らん 市闖に坐して

居然撫山谷 居然として山谷を撫せんとは

烟雲瞥過眼 烟雲 瞥として眼を過ぐ

髯蘇戒物欲 髯蘇 物欲を戒む

他日石易画 他日 石もて画に易へんか

紛紛較直曲 紛紛として直曲を較ぶ

孰與君曠懷 君が曠懷に孰いづれ與ぞ

棄寶如此速 寶を棄つること此くの如く速やかなるに

ところで此の詩は、蘇東坡の「仇池石」詩の韻を用いて作られたものである。すなわち「緑・足・腹・蹙・牧・瀆・玉・伏・ト・逐・谷・欲・曲・速」の十四の韻字を一字も換えることなく、そのままに詩を作っている。しかも東坡の詩意をよく踏まえての内容となっている。

それでは蘇東坡の「仇池石」詩を見てみたい。この詩には次のような序が附されている。

僕所藏仇池石、希代之寶也。王晋卿以小詩借觀、意在於奪。僕不敢不借。然以此詩先之。

僕の藏する所の仇池石は、希代の寶なり。王晋卿 小詩を以て借り觀んとするも、意は奪ふに在り。僕は敢へて借さずんばあらず。然して此の詩を以て之に先んず。

東坡は自らの藏する「仇池石」を王晋卿が借覽したいといって詩を寄せてきたが、実は奪い取ろうという意図を持っていることを知った上で、石を借す前に此の詩を作つて贈つたのである。

海石来珠宮	海石 珠宮より来たり
秀色如蛾緑	秀色は蛾緑の如し
坡陀尺寸間	坡陀 尺寸の間
宛転陵巒足	宛転 陵巒足る
連娟二華頂	連娟たり二華頂
空洞三茅腹	空洞たり三茅腹
初疑仇池化	初めは疑ふ 仇池の化するかと
又恐瀛州蹙	又た恐る 瀛州の蹙 <small>ちぢ</small> まるを
慇懃嶠南使	慇懃 嶠南の使ひ
餽餉揚州牧	餽して揚州の牧に餉 <small>けづ</small> る
得之喜無寐	之を得て 喜んで寐 <small>い</small> ぬる無し
與汝交不瀆	汝と 交はり瀆 <small>い</small> れず
盛以高麗盆	盛るに高麗の盆を以てし
藉以文登玉	藉 <small>し</small> くに文登の玉を以てす
幽光先五夜	幽光 五夜に先んじ
冷氣壓三伏	冷氣 三伏を壓す
老人生如寄	老人 生 寄の如く
茅舎久未卜	茅舎 久しく未だ卜せず

一夫幸可致 一夫 幸ひに致す可く
千里常相逐 千里 常に相ひ逐ふ

風流貴公子 風流の貴公子
竄謫武當谷 竄して武當谷に謫せらる

見山応已厭 山を見て 応に已に厭くなるべし
何事奪所欲 何事ぞ 欲する所を奪ふ

欲留嗟趙弱 留めんと欲するも趙の弱きを嗟く
寧許負秦曲 寧ろ許して秦の曲を負はしめん

傳觀慎勿許 傳觀 慎んで許す勿れ
間道帰応速 間道 帰ること応に速やかなるべし

さて、山陽はこの「研山」について文政五年（一八二二）五月二十五日付けの篠崎小竹・武内確斎宛ての書翰で、次のように言っている。

此度、得二一奇石一、この主人ニ償候詩一首、是篠兄流の詩故、乞二晒正一候、思召ハ被二仰下一、反古ハ原氏後書中ニ御封被レ遣可レ被レ下候。草々期ニ後更一候。頓首。…此詩、石癖の事故、米法ニテ認申候、其怪醜太甚。

自らを「石癖」と称している山陽の愛石ぶりが窺える。「米法」とは、蘇東坡と並ぶ石好きで有名な米芾（字は元章）のことである。

四

以上、今回は頼山陽の愛石趣味について見てきた。そもそも山陽の愛石趣味は、父春水（一七四六〜一八一六）の影響が大きかったようである。山陽は父春水から加茂川産の「雪屋」なる小石を譲り受けたのを機に、石に興味を持ったと伝えられている。「雪屋」は、いわゆる茅舎石といわれる田舎の茅葺き屋根の民家の形をした小石で、山陽は此の石とともに春水の筆による「雪屋」と書かれた扁額を贈られている。

春水の愛石ぶりを窺わせる詩文は幾つか見ることができ、ここではその中から次の詩を引いて稿を終えたい。この詩は春水の詩友である柴野栗山（一七三六〜一八〇七）が、その郷里高松の八栗山で採れた石（銘を「栗山」または「五剣山」という）を愛蔵していたのを詠じたものである。栗山が初めの二句「栗栗栗山栗、化為五剣一」を作り、それに応じて春水が後の六句を作った。そのいきさつは、この詩に附された次のような序によって知られる。

栗翁之物也。蓋其郷栗山之栗、化而為石。其形槎枒、其質玲瓏、真可把玩。翁口占「栗栗栗山栗、化為五剣一」一二句、命余繼之。栗山一曰五剣山云。

栗翁の物なり。蓋し其の郷栗山の栗、化して石と為る。其の

形は槎枒として、其の質は玲瓏、真に把玩す可し。翁は「栗栗 栗山の栗、化して五剣の一と為る」の一・二句を口占し、余に命じて之に継がしむ。栗山は一に五剣山と曰ふと云ふ。

栗栗栗山栗	栗栗	栗山の栗
化為五劍一	化して五剣の一と為る	
能為千仞山	能く千仞の山を為し	
忽在方丈室	忽ち方丈の室に在り	
鋒鏑割憂愁	鋒鏑 憂愁を割き	
光芒照卷帙	光芒 卷帙を照らす	
造物似私君	造物 私君に似せたるは	
非関縮地術	縮地の術に關はるに非ず	

*小論を成すにあたり、本学教授・文学研究科長の頼祺一先生より貴重な資料をお示し頂くとともに、多くの御教示を頂いた。ここに記して感謝申し上げます。

(注)

①『中国学論集』第十四号（安田女子大学中国文学研究会）「捜神記訳注（十二）」参照。

②我が国における愛石の歴史については、丸島秀夫『日本愛石史』（石乃美社）に詳しい。小論を成すにあたり大いに参考に

させて頂いた。

- ③『東海一漚別集』（玉村竹次編『五山文学新集』第四卷所収）。
- ④『東海一漚詩集』卷三。訳注は増田知子『東海一漚詩集』（白帝社）を参照。
- ⑤『佛光国師語録』卷八（『大正新修大藏経』卷八十所収）。
- ⑥『鏡堂和尚語録』卷二（『五山文学新集』卷六所収）。『語録』では「偈頌」として次の「菖蒲」とともに収められている。
- ⑦月刊『近代盆栽』（近代出版）通卷二九九号参照。
- ⑧『山陽先生遺稿』卷一。
- ⑨『山陽詩鈔』卷六。
- ⑩『頼山陽書翰集』続編。
- ⑪『春水遺稿』卷五。

赖山阳与石趣

Toshiyuki SATO

在我国，与盆栽一样，石趣也是一种具有代表性的传统文化。从历史上看，石趣始于中国宋代苏东坡·米芾等文人的文房清玩。

在我国，石趣的原型可追溯到镰仓时代流行于禅林社会中的昌蒲石趣。到了江户时代，形状与现在基本相同的水石已为众多文人所喜爱。

本文论述了水石的上述历史，并重点考察了赖山阳的爱石情趣。